
俺の日常

森下しあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の日常

【Nコード】

N9690P

【作者名】

森下しあ

【あらすじ】

ここはパラレルワールドの軍事国家の日本。今日は国立軍事高校の入学式。主人公、武沢翔たけざわしょうには隠し通さなければいけない秘密があった。その秘密とは…？そして少年と少女たちの戦いが今始まる。

番付

今日は4月9日、入学式。俺は今から高校へ向かう。普通は、不安やら期待やらで胸が一杯になるだろう。しかし俺は平常心を保っている。理由は簡単だ。中学となんだ変わらない、そう思うからだ。まず、高校は中学に隣接している。二つ目に、生徒たちはほとんどがエスカレーター式で持ち上り。

しかし不安要素が一つ。それはクラス替えだ。生徒の一年を左右するともないものだ。もしなじみの無い人ばかりのクラスになればその年は一年苦勞が絶えないだろう。しかも、この国立軍事学校には伝統のクラス替えがある。それは「パワーランクリスト能力番付」というものを用いる。ああ、本当に憂鬱でしかたない。

そんなことを考えていると、「ようー！武沢！」

声のするほうを振り向くとそこには、俺の友人、なかむらだいち仲村大地がいた。

「おう」

俺は素っ気なく言葉を返した。こいつとは、いつもこんな感じだ。

「今日はアレだな」

あいつは遠くを見つめながら言った。もちろんアレとは「パワーランクリスト能力番付」のことだ。俺たちのように能力を使えない者にとってこれはただの苦痛でしかない。

俺も嫌だったので、「そうだなー」と返事を返しておいた。「じゃ

あ、今回は何組に？」と仲村はこちらを向いて微笑んだ。

「決まってるだろ、BだB！」

そんなことを話しつつ、通い慣れた通学路を進む。

門の前にはたくさんの人がいる。大抵のやつは見覚えのある顔だ。その中に一人、おとなしそうで落ち着いた雰囲気を持つメガネの女の子が居た。確かあの子は昨日自転車で川に突っ込んでいった子だ……。

「なあ、あの子誰だろ。」仲村は言った。こんな人ごみでもあの子が目に入るのは当たり前だ。なぜなら彼女の顔はまるで人形のように、白くてきれいだったからだ。そのときあの子はこっちを向いた。そしてこちらに向かってやってきた。

「どうも！昨日はお世話になりました。」
それは彼女の口から発せられたとても可愛い声だった。

「いえいえ、あ、大丈夫ですか？」
いきなりやってきたもんだから、俺は焦った。

「あのー、お二人はどのような関係で？」
彼女が次の言葉を発する前に仲村が口をはさんできた。しかし、そんなこと話すのが面倒だったので俺は華麗に無視した。
「えー、無視するの？」などと仲村が愚痴っていたが、俺はさらにそれをスルーして彼女と話した。

話したのはたった3分ぐらいだったが、彼女についてたくさんのか

とが聞けた。彼女の名前は百合本文恵ゆりもといみえというらしい。俺たちと同じ学校だったが、彼女は医学科らしい。言われてみてればそんな気がする。そして、俺の知らない地名の遠いところから引っ越してきたんだという。ここは一応、天下の国立軍事学校なのだから、専門分野を学ぶために遠くからくるやつもいる。

そして、この辺りを案内するという約束を取り付けることもできた。

俺が彼女のことを考えていると仲村がすねた顔をした。

「で、なんなんだあの子は。」

さすがに教えてやらないわけにもいかなかったので説明してやった。

「別になにもないけど、俺が昨日コンビニに行ったときに会ったんだ。あの辺に川があるだろ、あそこに自転車で突っ込んでいったんだ。」

「あの子が？川に？」

仲村は驚いた顔をしていた。

無理もない。道路とあの川の落差は相当なものだ。落ちたらひとたまりも無い。

「ほんとほんと。で、あの子は川に落ちて助かったんだけど、自転車が岩に挟まって抜けなくて、それを俺が手伝ったって訳。」

説明が終わると仲村は「究極のドジっ子か」と気持ち悪い微笑みを浮かべていた。しかし、これはいつものことだったので気にしなかった。

そんなこんなで時間が経ち、入学式が行われた。これは入学式、と

いうより開会宣言と言った方が正しいだろう。この学校の戦闘科はS、A、B、Cと4つに分かれており、実力順に並べられていく。実力というのは軍事学校らしく、戦闘能力をしめしている。

そして、その独特なクラス分けを行うために「パワーランクリスト能力番付」を制作しなければならない。

その方法は簡単だ。生徒達をトーナメント方式で戦わせる。それだけだ。そして今からそのトーナメントがとり行われる。もちろん戦闘科の生徒は全員だ。

そして、入学式が終わった。仲村とこの俺、武沢はBクラスを目指す。能力を使えないものとしてはBぐらいが限界だ。それでも無い奴もいるが。Bクラスになるためには一回戦だけを勝ち上げれば良い。それに二回戦からは能力者と当たる可能性もある。相手が悪ければえらい目にあわされる。そこで俺たちは一回戦が終わったら共に屋上でサボろう。ということになっていたのだ。

俺は早めに順番が回ってきた。8番目ぐらいだった気がする。仲村は後半のほうだったので、俺の戦いを見に来た。「がんばれよー」とか何とかいつている。まあ、無視だ。そして戦闘用練習用のグラウンドに上がる。相手はどうやら万年Cクラスの見たことがある奴だった。俺は平和主義者を気取っている訳ではないが、あまり戦うとかそういうのは好きではない。軍事学校に来たのはいろいろ事情があるからだ。しかし、戦わなくてはやっていけない。そこで俺はある必殺技を身につけた。

乾いたグラウンドに笛のおとが鳴り響く。戦闘開始の合図。相手はCクラスとはいえ、毎日訓練を積んできたやつだ。侮ってはいけない。相手は勢いよく拳を構え走ってきた。まさにアニメやマンガの雑魚キャラのような突っ込み方だ。

そして相手はいきなり鼻を狙ってきた。人間の急所は体の真ん中にある。鼻もそのうちの一つだ。俺はそれを避けて足をかけようとした。しかし手応えはない。気づいたときには奴は俺の上にいた。こちらもそれなりの訓練は受けている訳で、すぐさまその様子をとらえることが出来た。空中は気づかれたら終わり、そう、身動きが取れないからだ。そいつが殴る体勢にはいった瞬間、後ろに回り込んだ。こうなってはもう遅い。なにしろ身動きがとれない。ここでやっとなの必殺技だ。

スリープポイント
「必殺、眠りの急所！！！！！！」
そして相手はバサリと倒れ込んだ。

また笛の音が響いた。これは戦闘終了の合図。

監督の先生がCクラスの奴に冷水をかけた。いくら起こすためでもひどいだろう、女なのに荒っぽいな。

そんなことを思っているとその凶悪女教師がとニヤリと笑いながら近づいてきた。

「お前、いまなに考えてた？」

「何も考えてないっすよ。」

冷静に作り笑いをしながら返事をした。

まさかあの先生が読心術を使えるとは…。そう思っていると、またもや

「おい、覚えておけよ。お前らの考えてることはだいたい分かるんだ。教師をなめんじゃねーぞ。」

と言われてしまった。何とも恐ろしい。そして、適当に返事してさっさとそこを出て行った。

「お前、必殺技とかあったんだ。」

出てきて最初に仲村に言われた。しかも少しバカにしたような笑いで。これは去年仙人のところまで修行して身につけた、だとか、完成させるために本当は10年かかるところを3日で完成させた、だとか適当なことを言っておいた。ちなみに俺たちの会話はこんなくだらない話が8割を占めている。

これで俺の出番は無事終了し、眠いので仲村の試合は見ずにそのまま屋上で寝ることにした。仲村には反対されたが、別に関係ない。そそくさと屋上へ向かった。校舎は俺たちの思った通り、中学と変わらない造りだった。屋上へは行ったことはないが、多分大丈夫だろう。しかし、この現場を見つかつては大変なので慎重に行くことにした。

階段を登ろうとすると、上から足音が聞こえた。やばい、他の学科の奴らはもう帰る時間だ。出会ってしまつては怪しまれる。

「まじ最悪だよーウチのクラス。」「だねー。」

なんとか間一髪近くの部屋に逃げ込むことが出来きた。無事に屋上へいけるのか…。今から少し不安になってきた。

番付（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これからも頑張りますので、よろしく願います。
コメント下されると嬉しいです。

来春

女子たちの足音は次第に小さくなっていった。まだ心臓がドクドクと波打っている。静かな廊下。この様子をみるとあいつらが一番最後に残っていた生徒だろう。俺は部屋を見回した。机とイスが並んでんでいる。それと時計2つと何も入れられていない棚だけがそこにはあった。どうやらここは俺たち1年の教室らしい。

ぐるっと一周見回したところで外にでた。階段をのぼっていく。今度は順調に。思った通り誰も残っていないようだ。足がしだいに重くなっていく。すると、扉が見えてきた。薄緑に塗られた重い扉を開くと光が差し込んできた。

眺めはやはり別館の中学校とほとんど変わらない。しかしただ一つ、気になることがあった。それは人影だ。タンクの後ろ側に誰かが居る。引き返そう、そう思ったときにはもう手遅れで、既に気づかれていたようだ。

「誰か居るの？」それは聞き覚えのある可愛らしい声だった。

「百合本さん…？」

一瞬混乱したが、これは幸運だ、俺の脳はそう判断を下した。

すると百合本さんはこちらへ来て

「武沢くん？よかった、知ってる人で。」と安心した顔で言った。

俺も同じことを思っていたところだ。そうして今日2回も百合本さんと話すことになった。つい俺は、運命の人だとか赤い糸だとかそ

んな乙女チックなこと考えてしまった。そんなこと考えているとだんだん緊張が高まっていった。

「俺も良かったよ。百合本さんで。」というと彼女はふざけたような笑顔をして

「百合本さんじゃなくて、文恵とかでいいよ!」といった。

しかしこれは、女子との関わりが薄い男子高校生にはすこしハードルが高すぎたようで「でも、恥ずかしいし…。」と言ってしまった。本当は文恵でも文ちゃんでも文恵さんでもなんでもいいから名前を呼びたいのだが、俺には出来ない。これを心の葛藤と言っのだろう。

「じゃあ、2人だけの時は、文恵って読んで」その言葉はまさに俺が望んでいるものだった。

「うん、分かった。…文恵…?」と少し照れながら呼んでみると「はい、よろしい」と、人差し指を出して、先生のような口調でまぶしい笑顔をキラキラと輝かせながら言った。これは端から見たらニヤニヤしてしまう光景だろう。そう思った俺は今まさにニヤニヤしているのかもしれない。

そして、俺からも名前で呼んで欲しいと勇気を振り絞って言ってみると、彼女の可愛い声で呼んでもらうことに成功した。これは、女子に免疫が無い俺としては大きな進歩だ、と自画自賛してみた。

それからたわいないことを話し、なぜ屋上にいるのか聞いてみた。するとどうやら彼女も屋上の空気が好きらしい。ますます何かの縁を感じる俺。これが、噂に聞く「赤い糸」で結ばれている状態なのか。そして、この感情を「青春^{せいしゅん}」という漢字2字、ひらがな5字で表すのか…。俺は15歳にしてはじめて春の訪れを感じた瞬間だった。

屋上

「もう帰らなくちゃ」

そんなお姫様みたいな言葉を残して文恵は帰って行った。少し名残惜しそうにしていたところがまた嬉しかった。またこうして屋上にきて2人で話したい、そんなことをずっと考えていると、あの金属製の重いドアが開いた。

「たーけーざーわー！」

と相変わらずのテンションで仲村がやってきた。俺はずっと文恵のことを考えていたので、顔が赤くなっていなにか心配になった。そこで景色を見るふりして冷静を装った。

「ああ、なんだ？もう終わったのか？」

「わずか0.01秒で倒してしまった。」

「気だよ気。オーラっていうの？俺の強いオーラのせいで倒れちゃったんだ。全く触らずに勝っちゃったよ。」

ちなみに気の専門家のおじさん、とやらの修行をうけたらしい。そして、どうでもいい情報だが、そのおじさんは公園などにたまに出没するらしい。本当にどうでもいい情報だ。

そんな少し痛い話をしているとだんだんうとうとしてきたので、当初の目的であった昼寝を実行することになった。春の陽気のなか、俺たちはしばらくの間寝ていた。

すると、もの凄い音がした。まるで何トンもあるトラックを高いところから落としたような音だった。ふつつなら、「なんだ…この音は…」となるものだが、既に検討はついていた仲村に至ってはまだ寝ている。下を見ると案の定俺の思った通りだった。

戦闘用グラウンドで起ったらしい。そしてそこには少女がいた。名前は橘…？だった気がする。この学年1番の戦闘能力の持ち主だという。いつも1という数字の隣には彼女の名前があった。噂によれば、国内でも有数の実力らしい。

それと、本当に大きくて高そうな車が木っ端みじんに…。本当に世にも恐ろしい光景だ。そのしたには金持ちで有名な西園寺良樹さいおんじよしきが埋まっていた。普通なら死んでいるはずなのだが、守護系の技によって守られていたので無事らしい。防護壁バリアはおそらくあの凶悪女教師が施したのだろう。

その無惨な姿を見てみると、仲村がようやく起きた。仲村がその光景を見ると「あれは西園寺の車だ。」と言った。本当にそうだとしたら、彼がなんも哀れだ。それにあの橘って女はなんと非道なのだろう。

「腹減ったな。」と、仲村が突然立ち上がった。
「弁当もってくるから待つてろ。」そういつて彼は下の階に行った。どこに弁当などかくしていたのだろう。まったく準備の良い奴だ。

そんな風に少しあきれながら、また景色を見た。
たまたま向かいの校舎の方を見ると、中学のとき隣のクラスだった

おおたわら
大田原がいた。しかし、いつもの様子ではなく、挙動不審な動きをしている。あいつは、何をしようとしているんだ…？

召使

静寂につつまれた校内、コツンコツンと足音が一つ。姿も陰も無い。そこにはただ足音が、コツンコツンと響くだけ。一方外はにぎやかに華やいでいる。全く別の世界のように、そこは暗く静まり返っていたのだった。そんな校内に一人の男が現れた。

「見えた。」

ようやく着いたここはさつき大田原がいた教室のはずだ。やっぱりあいつは居ない。そりやそうだ、ここからこの教室まではかなりの距離がある。しかし、あいつは絶対まだこの辺りに居るはずだ。

そう確信したとき

「…霧生^{きりゆう}さまつ。」と、耳元でささやく声がした。

すぐさま振り向くが誰もいない。しかし、気配は感じる…というか、足音が完全に聞こえている。その足音のする方から

「私を見つけてくださいっ！」と無邪気な声が聞こえてきた。

実は俺は、この声の正体を知っていた。それに見つけることなんか簡単だ。そして足音のする方に迫って行き、両手で思いつきり捕まえた。

その瞬間俺の両手の感覚神経がプニつ柔らかいあの感覚を伝えた。その伝達に脳は「やってしまった」という判断を下した。すこし場所を読み間違っただけだ。

そして、その行動により謎の足音は姿を現した。小柄でふたつくくりをしたその女は凶暴な性格をむき出しにし、俺に殴り掛かってきた。…しかもグーで。

「バカーっ!!」

“バカーっ!!”とかいってもお前は可愛くないんだ。そう、こいつは俺の部下……というか召使だ。

「今のは事故だし、俺何とも思っていないから大丈夫。」そう言うと、彼女はまた怒ったようだ。そんなことより今は大田原を見つけなければならぬ。

「…事故?何も思っていない?…本当にそうなのですか?牡丹^{ぼたん}は、牡丹は、とても悲しいです…。…いくら霧生さまにお使いしてるからって、こういういかげんしい事はダメじゃない…ですか…?責任とってください。」

ちなみに霧生とは俺のもう一つの名前だ。あの伝説の台詞“責任とって”が出てしまった。こいつは末期だ、と改めて実感した。

「本当に事故だし、何も思っていないって。悪かった。あんな小さいのに当たってしまうなんて、ほんと事故はすごいな。奇跡的だな。……で、こちら辺にデカイ奴が通らなかつた?」

そう聞くと、まだ何かごちゃごちゃ言っていたみたいだったが、とにかく大田原は上の階にいったらしい。

「じゃあな。」と言って階段を駆けあがったのだが、例によってあいつは着いてきた。

「待ってくださいーい!」と大声をあげた。そして静かにしろ、という合図を出せば笑顔で首を縦に振った。

本当にここからは慎重に行かなければ……。そう思ったとき、上の階から誰かの足音が聞こえてきた。どうやら、あっちは俺たちより早く動き出してしまったようだ。

爆弾

静まり返る校舎の一角、ドクドクと波打つ心臓、少しづつ大きくなってくる足音。春だと言うのに肌寒くなってきた。最悪のシナリオになってしまいそうだ。せつかく「青春」とやらを経験したばかりだというのに、この落差はきついものだ。

「おい、いるんだろ。さつさと出てこいよ。」

まだ数メートルも離れているというのに、ここに居ることがもう分かっているらしい。さすがA組は違う。まあ、しかし、いずれバレるのは一緒だから関係ない。

俺は思い切って階段を上りきり、声の主の正面へズカズカと歩いて行った。

「はいはい、ここに居ますよ。…そんな物騒なもん持って何しようとしてんだ？」

ここは強気の俺に切り替えて、乗り切るしか無い。そう思い、大胆に言ってみた。

「あ、この爆弾のことだよな。」

そう言うと、爆弾らしきものを出した。

“らしき”というのは、俺の知っている爆弾とかなり違っていたからだ。最大の相違点は大きさだ。とても小さく、片手で包み込めそうな大きさだ。こんな子供だましの爆弾で何をしようというんだ。

「知ってるんだったら、記憶消さないかね。」

俺に向かってまっすぐ歩いてきた。おそらく記憶を操作する能力を

持った能力者だろう。

そして真っ正面に来たところで足を止め、大きな手を高い位置から頭の方に近づけた。俺は恐れを見せまいと上を見た。「なんだ？その目は。」と相手もこちらを見つめてきた。「いや、お前のしゃべり方なんかおかしいな」と思ってた。お前、大田原じゃないだろ？」実はさっきから違和感を感じていたのだ。

「まあ、そうなんだけど…。余計なことはしゃべるなって言われているから、もう記憶消すね。」

そう言い終わるか、終えないぐらいでアイツが割り込んできた。

「牡丹は、どんなことがあっても命を懸けて霧生さまをお守りします！」

そして俺の前にたつてその細い両腕を精一杯大きく広げた。

「じゃあ、このお嬢さんからでいいかな？」いいとも！…なんて言うかよ。こんな奴に、こんな小さい女に守られてたまるか。それに、こいつを俺の身代わりになんてできない。

その瞬間大きな手が白っぽい光を放った。それと同時に俺はその小さく華奢な彼女の前に出て行った。

「…さようなら。あらら、女の子を守るなんて粹だね。」

嫌みな言い方だった。

「…守ったんじゃないよ。こいつが邪魔だったの。それに俺はピンピンしてるぜ。」と笑みを浮かべながら言い返してやった。

「…なんでだ…。なんでなんだ？」

驚くのも無理はない。記憶を消されたはずの人間が平然とそこにい

るのだから。記憶を消されなかったのは、俺の脳が一級的能力者によって保護されているからで、普通の刺激程度なら効かない。

「なんでか教えてあげようか、っ！」

と牡丹が言いかけたところで慌てて口を塞いだ。

危ない、なんなんだこいつは。俺を守ると言いながら、危険を招くようなことを言おうとする。つまりバカなのか。

「秘密だ。お家に帰って作戦でも練り直すんだな。」

と言うと大田原は不気味な笑みを浮かべた。

「まあ、いいや。お前ら二人ぐらい、いつでもに消せるしな。あ、ちなみに爆弾はもうすぐ爆発するから、よろしくね！」

というと、去って行った。正しくは大田原の中から出て行った。本当に余計なことをしゃべる奴のようだ。こちらにとっては都合だが。そして力の抜けた大田原は倒れた。まずこいつを運ばなくてはならない。しかし、大柄で運びにくいうえ、たらたらしていると爆弾が爆発するかもしれない。どうすればいいんだ…。

分解（前書き）

お待たせしました。

ようやくパソコンが復活しました。

分解

「あ、そう言えば、女子トイレでこんなものを見つけましたよ。」

そう言つて牡丹はおもむろにポケットから黒いものを出した。

「もつと早く出せよー。」

なんか要領悪いなーと思いつつ、牡丹からそれを取り上げて、耳を近づけてみる。するとカチカチと時計の指針ような音がする。この様子とさっきの奴の言葉からしておそらくこれは時限爆弾だろう。

「どうですか？」

「これだつたら自分で分解出来そうだ。やってみる。」

一応一通りは学校で習つたんだ。出来ないはずはない。

こう見えても俺は必要最低限の物は持ち歩く準備周到くんなので、爆弾処理に必要な道具は持っている。まあ、実際使うのは初めてののだが。

ようやく日の目をみた道具たちは一つの傷もなく真つさらだった。

爆弾と道具を改めて見ると緊張してきた。

「い、いくぞ。」

「頑張つて下さい、霧生さま。」

手は精密な動きなど出来ないのではないかというほどにプルプル震えていた。

まずは外側だ。

思ったよりも固かったので思い切って力を入れてみることにした。
すると爆弾の外壁は勢い良く飛んでいった。

「霧生さま、ビビりすぎです。でも、そんな霧生さまも……」

いつの間にか俺は尻餅について後ずさっていた。無意識でこんな行動をとってしまうなんて……。自分のことながら情けなく、そして恥ずかしくなってきた。それにしても、牡丹には緊張感というものがないのであろうか。

気を取り直して爆弾をもう一度見ると、火薬は少量しか入っていないかった。それに、かなり単純な造りだった。これだったら爆発しても……良くない！この学校でできるだけ騒ぎを起こしてはいけいないんだ。地味に、そして目立たないように暮らさなければいけない。

「牡丹、下に行くぞ。大田原はそこに置いといても大丈夫そうだ。」

本当に大田原には悪いけど、爆弾の威力はそんなに強くない。心の中で“ごめん”とつぶやきながら階段を駆け下りた。

他に爆弾がありそうな場所といったらあの教室しか無い。

教室

階段を降りてすぐ、あの教室が見えてきた。あの教室とは、最初に大田原を見た教室だ。廊下を駆けながら窓の外を見ると、戦闘科の生徒達がまだたくさん残っていた。いや、むしろ一カ所に集まっていた。おそらく決勝戦でも行われているのだろう。

ようやく例の教室に着いた。入り口の上のところには“1-C”と書かれてあった。そして、俺は扉の取っ手に手をかけ、勢い良くスライドさせた。

ガラガラつとレールと扉の摩擦の音が聞こえた。それと同時にある人影が見えた。

「仲村!？」

「あ、居た居た。弁当食べようぜ。」

なんでここにこいつが……。何も知らずに呑気なこと言いやがって……。仲村も俺を見つけたということは、屋上からここは相当見通しがいいのか。

「仲村! 頼みがある! 爆弾を見つけてくれ!」

「おう! 爆弾な。わかった。」

こんなこと頼んだのは他でもない仲村だからである。こいつはこういうノリでいつも話しているから怪しまれたりしないだろう。……大丈夫、こいつは本物のアホなのだから。俺はそうやって自分自身

に言い聞かせた。

黒板の横の棚をあさっていると、仲村が急に口を開いた。

「あのー、その女の子だれ？」

……冷静になるんだ、俺。大丈夫だ、俺。言い訳を考えるんだ。そうやって、爆弾を探しながら頭をフル回転させた。人生で3本の指に入るぐらい頭を使ったような気がする。

あー、思いつかない。……もう、もう諦めよう。こいつのアホさを信じて忘れるのを待つことにしよう。こうなっては時間だけが見方だ。

……時間、時間、時間？ そうだ、そう言えばこれは時限爆弾だ。何時爆発するのか聞き忘れてしまった。実際聞いたところで教えてもらえるのかは疑問なのだが。

「おい牡丹。なんか見てないか？」

「あれ……、俺はまたスルー。精神的にキツいんだけど。おーい。」

教室を再び見渡す。先ほど来たときのように荷物は何も入っていない。すっからかんの本棚と何も入っていない軽い机、画鋲の後が残る掲示板。上の方には時計が二つ。

「見てないです。お前は何か知らないの？」

牡丹は俺に対して敬語で話す。そしてそれを決して崩そうとはしない。初めて出会ったときからずっと……。つまり“お前”とはこの場合、アホの代名詞、仲村のことだ。

「あ、俺のこと？……強いて言えば、時計が怪しい」

フフフと不気味な笑み（？）を浮かべ、独特なポーズでかつこを付けたと言った。いわゆる“ドヤ顔”という奴である。

すると牡丹は急に真剣なまなざしで仲村を見た。

「……確かに、時計が2つあるのはあやしいわ。私は今日ずっとこの校舎に居るけど、他の教室は1つしかなかった。あんたやるわね。名前はなんて言うの？」

「仲村大地だ。そうだな、センタービレッジグラウンドとでも呼んでくれ。」

俺の「あほか！」というツツコミと同時に

「かつこい〜！〜！」

などとノリノリの奴がいた。英単語をむやみやたらに並べただけのものに投げかける言葉じゃない。

「でもー、呼びにくいから……。セ、センタービレッジ…ラージ…グラウンド……。セ？じゃ、じゃあ、最初の文字とって、セビラグでー！〜！」

「却下で。」

爆発

「それは裏の名前だ。仲村とよんでくれるか……。」
「わかった！仲村！！」

なんだかすごく楽しそうに2人が話していた。前々から思っていたのだが、こいつらからは同じ匂いがする……。まさに、類は友を呼ぶ、かというやつか。

それにしても、牡丹は初対面の人とでもあんなしゃべり方するのか。これで確信したのだが、あいつが敬語を使うのは俺と俺の家族だけだ。あとで注意しておこう。

「いいからお前ら、時計取ってくれ！」
この2人に緊張感というものは無いのか。たとえ小規模でも爆弾は爆弾なのだ。

「ほいほい。」
俺が大きい声でいうと仲村は壁にかけてあつた時計を取った。

次の瞬間、時計が宙を舞った。

事故が起こった瞬間に周りがスローモーションのように見えるあの現象のように時計はゆっくりと落ちていった。これは確か、脳が過剰に働いているせいで見えたんだっけ……。一瞬のうちにずいぶんいろんなことを考えた。その結果、今一番やるべきは時計をキヤッチすることだった。

走り出そうとしたその瞬間、時計は地面に着こうとしていた。

そしてスローモーションの効果が一気になくなったように時計は急に速度をあげた。

本来の時計の落ちた音はすっかり爆発音にかき消されていた。

古風なたとえでいえばさんまを焼いたときのように、煙が教室中に立ちこめていた。

爆弾とは名ばかりでこれではまるでクラッカーだ。

「ゲホッ、ゲホッ……。仲村……。お前な、」

その瞬間扉が開いた。

煙がスーッと扉を抜けていくと、そこには嫌な笑みを浮かべたあの女教師がたっていた。

「お前はさっきの奴だな。能力番付
パワーランクリスト
サボッて何してるんだ？」

「え、あの、それは……。」

「床が壊れてる……。」

驚いた顔を一瞬見せたがまたもとの負のオーラをまとう笑みに変化した。

「ここ、私の教室なんだー。……。どうなるか分かってるよね？」
フツと笑うと同時に技をかけてきた。

「い、痛い痛いー!!」

なんだ、こいつ。ただの女のくせにすごい馬鹿力だ。さすが、軍事学校の先生の力という訳か……。恐ろしい。今後はよりいっそう気をつけて行動しよう。そう誓ったのだった。

仕置

「うわー、もうやだ……。」

隣でうなだれているのは仲村だ。俺たちは能力番付をサボったので、罰として校庭200周を命じられたのであった。今日はこれが終わるまで帰らせてもらえないらしい。……始業式なのに。

「なー、今何周目だ？」

「ちょうど60周目だ。」

俺たちはこれを誰もいない朝っぱらから始めて今に至る訳だ。現在8時20分、生徒達がどんどん登校してくる。校庭で一年の二人と先生一人がいるなんて、目立って仕方ない。生徒達の冷たい視線……。

しかし、なんだあの先生は。名前は確か、井上……。朝っぱらから生徒の補習につき合うとは、まったく物付きな先生だ。今も登校してくる生徒たちに挨拶をしている。人気のある先生のように、生徒たちのほうからよっていつているような様子だ。

「おい、お前ら、チャイムなるから早く着替えてこいよー。」

といきなりこつちを振り向いていった。

「61周目だからな！覚えておけよ。」

またあの笑顔をみせた。何とも不思議な人だ。生徒達と挨拶やら会話やらしているかと思えば、ちゃんと見て回数まで数えているなんて……。まさに鬼だ！

「わかったら、さっさと行く！あと、余計なことは考えなくていいぞ。」

「はい！わかりました！」
怖い、怖すぎる。また勘付きやがった。これは危険リストに入れておいた方がいいかも知れない。

着替え終わると、俺たちは始業式が行われる体育館に向かった。綺麗な校舎に人はほとんどいなかった。もうちょつとしたら始業式が始まるのかもしれない。

「なあ、知ってるか？今日はあの大元帥の息子がくるんだってさ。」

「へー、そうなんだ。」

ということは、今日は久しぶりにあいつに会えることになる。しかし、おかしい。それならば俺の所にも連絡が入るはずなのに……。

そうするとパツとあいつが姿を現した。

「あ、昨日の！」

「牡丹……なんか言うことあるんじゃないか？」

すると牡丹は申し訳なさそうな顔をしてもしもじと一通の手紙を力バンから出した。

「すみません！でも、ずっと置いといたんですよ……？」

「どこに？」

「アパートです……。」

「はあ……。もういいよ。」

俺はこのところ用事でずっとアパートを開けていたというのに。

「ほんとにごめんなさい。」

目に涙を溜めて牡丹は言った。

「いいじゃん、よく分かんないけど、失敗ぐらいだれにでもあることだし。」

仲村が言った。

本当は、そんな軽いもんじゃない、と言いたいが、俺たちの生きる失敗の許されない世界とこいつらの生きる生温い世界は全然違う。それに、こいつはいい所もあるし、今日は許してやろう……。かな？そうは思っても、そんなに素直にはなれないので、とりあえず無愛想に手紙を受け取った。

そして小さな声で耳元で

「お前は警備隊のところに行っておいてくれ。」
囁いた。

こついうのは一般人に聞かれては困るからだ。

「耳元で囁かれたら、牡丹惚れちゃいます。ていうか、もう惚れますけど！じゃあ、行ってきますね！」

急に笑顔になって、俺の方に手を振ってから行ってしまった。

なんか気持ち悪いけど、まあ、いいとしよう。牡丹もいつも通りに明るく話しているし。

「武沢くん、一体なに言ったの？ “愛してるよ”とか “大好きだよ”とか “I love you”とか？」

「言っていないから。それに百歩譲っても “I love you” はねーよ。」

どこの歌詞だよといったツッコミのほうがよかったか、紛らわしいことばかりしやがって。

「てか、あの子との関係は？」

「……ストーカーかな？」

この答えはあながち間違っていない。ほぼ一日中近くにいるわけだし、時々変態じみたことや気持ち悪い発言を繰り返している。正確には召使だけだ。

「ス、ストーカー……？なんであんなカワイイ子が。」「
そんなことを言って本日2回目、仲村はうなだれていた。」

仕置（後書き）

長らく放置しました。
すいませんでした！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9690p/>

俺の日常

2011年3月27日21時48分発行